《討論》

植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する
―板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』（2021 年）を手がかりに

水谷　智
塩川伸明
戸邉秀明

本稿について

本稿は，板垣竜太氏（同志社大学教授・朝鮮近現代史）による著書[1)]に関する公開シンポジウムで発表されたふたつの書評コメントから構成されている。このシンポジウムは，「植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する－板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』（2021 年）を手がかりに」というタイトルで，2022 年 3 月 8 日にオンライン（Zoom）で開催され，100 名をこえる参加者があった[2)]。主催は同志社大学人文科学研究所・第 8 部門研究（第 20 期）「現代レイシズムの批判的比較分析－植民地研究との融合を目指して」（代表：菊池恵介）であり，企画は同研究班の兼担研究員のひとりである水谷智（同志社大学教授・イギリス帝国史）を中心に進められた。ふたりの評者は塩川伸明氏（東京大学名誉教授・ロシア政治史）と戸邉秀明氏（東京経済大学教授・日本近現代史）であり，以下のふたつのコメントは，当日の記録に塩川氏と戸邉氏が加筆修正をしてできあがった 2 本の原稿を，水谷が 1 本に編集したものである。なお，これらのコメントへの板垣氏による応答は本号に掲載された別稿を参照されたい。（文責：水谷智）

1　塩川伸明氏によるコメント

はじめに

言い訳を長々としたくなる誘惑に駆られますが，時間の制約もあるので，最小限の前置きと言い訳から始めます。板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』は一読して明らかなように，多岐にわたる論点を取り上げ，斬新な視野に立って複数の学問分野を縦断する形で野心的な問題提起を行った書物です［以下，本稿において板垣氏の上記書籍は「本書」とし，それからの引用や参照指示は頁数のみ記載］。私はその全容を把握することは到底できず，評者として適任だとは思えないということを，まず告白しておかなくてはなりません。本来ならば評者としてのご指名を辞退すべきであったという気も致します。にもかかわらず，とても消化吸収し切れないながらも多大な刺激を受けたものですから，この機会に著者および関係の皆さまと討論を交わすことができればという勝手な願いから，厚かましくも引き受けてしまいました。

言い訳はもう一言だけにとどめますが，2 月の半ば，この研究会のために本書を改めて読み直し，報告をまとめようと思い立ったまさにちょうどそのときに，ウクライナで戦争が始まりまして，気もそぞろな状態がずっと続いております。これは報告をまとめる上では妨害要因でしたが，戦争のさなかで人間が生きていくとはどういうことなのかというのは本書の主題の一つなので，その意味ではリアリティーが一段と増したという気がしております。

1.1　本書のいくつかの特徴と感想

本書にはたくさんの特徴があり，多くの読者がそれぞれにいろんな特徴に感銘を受けるであろうと思います。私の感想も恐らく他の皆さんとそれほど大きく隔たってはいないかと思いますけれど，取りあえず私にとって印象深かった点を幾つか挙げてみたいと思います。

まず第 1 に，史料の乏しい主人公の曲折した人生行路と学問的遍歴を丹念に復元している点が目にとまります。自らおっしゃるように，「散逸したジグソーパズルのピースを少しずつ拾って合わせていくような」もので（12 頁），これは気の遠くなるほど大変な作業だったろうと思います。

第 2 に，一個人を交差点とした全体史という特徴があります。このことについては，

さきほどの自著解題でもかなり述べられました。ここにはいくつかの要素が含まれます。ミクロな個人の軌跡とマクロな社会政治の歴史をかみあわせてとらえること，様々な学問分野の越境およびそれら学問の社会における位置の問い直し，南北朝鮮・日本・中国・ソ連・カナダといった諸地域の交錯，植民地期・冷戦期・ポスト冷戦期という長期の歴史への新たな展望などがあります。

本書自体に即していうと，「金壽卿の個人史および離散家族史を知れば知るほど，それが朝鮮半島をめぐる大きな歴史と連動している」（12～13 頁）とか，「私が志向しているのは，一個人を交差点とした「全体史」である。……個人は社会的な関係性において形成される以上，原子（atom）のようなものというよりは，無数の諸関係が行き来する交差点（interesection）のような存在である。……ブルデュー風にいえば，複数の界（champ）に身を置いている個人を描き出すためには，研究者自身が特定の界に閉じこもっていてはならない」（17 頁）といった記述が目にとまります。「本書は一種の学問史である。学問史は学説史（あるいは研究史）とは異なる。……学問史というものは，学問のあり方そのものの歴史化を追究する（305 頁）といった記述もあります。

個人の生活史・精神史と社会史のかみあわせとか，ミクロな視点から「全体史」を見るという点は，ある意味では，益田肇さんの著作[3)]——本書とほぼ同時期に刊行され，多くの反響を呼んでいる——と相通じる面がありますが，手法は相当異なるように思いました。益田さんもミクロな個人の「下から」の視点を重視し，それを上からの動きとかみ合わせようとしており，しかもその中で朝鮮戦争を重要な舞台としてとりあげ，それを通して冷戦史の見直しを企てている点は板垣さんと共通します。その一方，益田さんの取り上げるミクロとは，ものすごくたくさんの人たちを登場させて，膨大な数の人々の行動や思いを並べて，それらを大量に積み上げることによってマクロに迫ろうとしているわけです。それに対して本書の場合には，徹底して特定個人としての金壽卿およびその家族という一つの事例にこだわりながら，その視点からマクロな歴史に迫ろうとしている。これが非常にユニークな特徴であると思いました。これはどっちが優れているとか優れていないかという問題ではないでしょうが，とにかく私はこの点に強く印象付けられました。

第 2 点が長くなりましたが，第 3 に挙げたい特徴は，後知恵史観の批判ということです。本書の記述でいえば，「歴史は結果的にそうなったということであって，誰もが事前にはそうなることを知りもせずに，その都度判断しながら生きてきた。ああなるかもしれない，こうなってほしい，そういう予見と期待のなかで，あり得べき未来に賭け，

ときに判断を誤って失敗し，後悔しながらも時を積み重ねていく。終わった後に後知恵で振り返ってみれば，「必然」的な結果に見えるかもしれないが，そのときどきには知る由もない」（19 頁）ということです。私自身も日頃，後知恵史観をどう克服するかという問題を重要なものと考えているので，この指摘に深く共感しました。というのも，現代史の研究においては，多くの人々がかつて対象事項を自分自身で見たことがあったりするわけですが，その当時の自分がそれをどう見ていたかはあまり正確に記憶されておらず，むしろ後知恵を知ってしまった地点から振り返るということの方が多いように思います。その時点で当事者が抱いていた幻想は，後から見れば全く現実性のないものだったことが明らかであるため，その幻想を人びとがいだいていたという事実自体が忘れ去られてしまう。しかし，そうした幻想を書き付けた資料を探し出すことで，その時点で人々がいだいていた幻想を一種の歴史的リアリティーを持つものとして理解することができるというような指摘があります（147, 152 頁）。

現在ウクライナで進行中の戦争についても，少し前まではまさかこんなことにはなるまいというふうに多くの人が思っていたことが，あっという間に現実化したわけです。ところがテレビに出てくる解説者たちは自分の予想が外れたということは言わないで，「自分はこうなると思っていた」というような解説をしたがる傾向があります。もちろん，何か大変なことが起きるんじゃないかという漠然たる予感は，以前から多くの人が抱いていたわけですけども，実際に始まるまでは確定的ではなかったわけですから，最悪の事態が起きるかもしれないけれども，でも何とかしてそれは避けられるんじゃないか，戦争は多分起きないだろう，起きないでほしい，というような希望を抱いて，必死に祈っていた。そういう状況があったのだということが忘れられているんじゃないかという気がします。やや脱線してしまいましたが，そういう意味で，私は後知恵史観の批判という点に深い共感を覚えました。

4 番目に，離散家族のたどった運命に関する具体的かつ感動的な叙述があちこちにあります。ある書評に「離散家族の運命は涙なくして読めない」と書かれておりましたけど，私も読んでいて胸が熱くなる思いをしました。特に夫の再婚を知った妻の衝撃，それから金壽卿が亡くなったときの妻と次女の反応を書いたあたりです（276, 300 頁）。これは私が下手な解説をするようなことではありませんが，とにかく胸に迫ってくるものがあったということだけを申し上げておきます。

これ以外にも，まだいろいろな特徴がありますが，いちいち列挙していても始まらないので，大まかな感想はこの程度にしておきます。

1.2　知の社会史の事例としての京城帝国大学

「知の社会史の事例としての京城帝国大学」という大それた項目を立ててしまいましたが，これはもちろん，本来，私の出る幕ではありません。戸邉さんや駒込さんがいらっしゃる場で私のような者がこういうことに触れるのは恐れ多いことだということを自覚しております。それでいながら，どうしてこういう項目を立てたかと申しますと，私が在職中に同僚だった石川健治さんという法学者が書いた論文を大変面白く読んだ記憶がありまして，そこでは法哲学の尾高朝雄（おだかともお）という人が取り上げられていましたが，本書を読むうちにその記憶がよみがえってきたわけです[4)]。

ただし，この石川論文の収録された『「帝国」日本の学知』というシリーズについては本書「はじめに」の注 6 で，次のような批判があります。つまり，このシリーズは全 8 巻にわたって 1945 年以前の日本人研究者のみを扱い，朝鮮人や台湾人の動きが見えてくることはほぼないと指摘されています（374 頁）。この批判はたしかに痛いところを突いていると思います。ただ，別に弁護するわけではありませんが，そういう問題意識がまるっきりなかったわけではなく，かすかに意識しながらもなかなかそこに到達するのが難しかったということではないかという気がします。このシリーズの編者の名前を見ると，酒井哲哉さんとか山室信一さんとか岸本美緒さんとかいう人たちが名を連ねていて，課題としては全然意識していなかったわけではない，しかしその課題が十分は達成されなかったということではないかと思いました。

そこで，京城帝国大学にいた学者たちのうち，本書で取り上げられた言語学・哲学や石川論文の取り上げた法哲学以外の事例についてちょっと考えてみたいという気がしたわけです。憲法学では京城帝国大学に清宮四郎と鵜飼信成（のぶしげ）がいましたが，戦後，清宮四郎は東北大に移って，その門下から樋口陽一が出て，その門下から長谷部恭男，石川健治という，こんにちの日本を代表する憲法学者が出たという系譜があります。それから鵜飼は戦後，東京大学社会科研究所の教授となって，私の恩師である溪内謙（たにうち・ゆずる）さんはその恩恵を受けたわけです。

それから西洋史の高橋幸八郎も東大社研の教授となり，私のもう一人の恩師である和田春樹さんもその恩恵を受けました。和田さんのことは皆さんよくご存じと思いますけど，本来はロシア史研究者として出発しましたが，ある時期から南北朝鮮の歴史にも手を出して，その分野でもかなり大きな役割を果たすようになっている方です。和田さんがそのような研究をするようになったのに高橋幸八郎が京城帝国大学にいたことがどの程度作用したのか――ここら辺は，私にもよく分かりません。ただとにかく，そういう

流れを通じて何かがあったんじゃないかという気がしないでもありません。

もう少し一般化して言いますと，一部に植民地肯定論，「案外よい面もあった」という議論がありますけども，これを避けながら，かといって植民地に存在していたさまざまな制度，あるいはそこで生きた人々の軌跡を単純に無視するのでもなく，その文脈を踏まえつつ個々人の軌跡をたどることの意味を考える必要があるのではないか――そういうことが，本書で提起されているように感じました。社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）としての学生同士の横のつながりとか，「植民地の帝国大学における意図せざる帰結」（41～42 頁）というのは非常に面白い指摘です。いま引用した箇所は，直前にある朝鮮人学生同士の横のつながりということを受けていますけれども，そういう学生同士の横のつながりの他に，小林英夫と金壽卿の関係なども「帝国大学における意図せざる帰結」にあたるのではないかという気がしたわけです。

1.3　構造主義言語学・マール学説・スターリン言語学論文

この項目を立てたのは，恐らく私に期待されているのは，マールとかスターリンとかに関して情報提供することではないかと考えたからですが，実はあまり詳しく知っているわけではないということをお断りしておかなくてはなりません。私は言語学という分野に素人的な関心を昔からいだいていましたが，それはあくまで素人としてということであり，ソ連の言語学についても生かじりの知識しかもっておりません。私の知る幾つかの関連文献は注に挙げておきますので，参考にしていただければと思います[5)]。

まずニコライ・ヤコヴレヴィチ・マールとはどういう人だったかということです。生まれたのは 1864 年，これはロシアでは農奴解放の年，日本でいうと明治維新の少し前，そういう時代の人です。父はスコットランド人，母はグルジア人です。ついでながら，この頃，日本ではジョージアと呼ぶのが趨勢となっていますが，これは現地での呼称ではありません。現地ではサカルトヴェロという呼称なのです。そしてグルジアとジョージアの違いは，ジョージ／ゲオルク／ジョルジュの違いのようなもので，実質的な差があるわけではなく，グルジアをジョージアと呼び換えたからといって特に正確になるわけでもありません。それはさておき，とにかくグルジアのクタイシというところで生まれた混血の人で，20 以上の言語に通じていたポリグロットだったということです。博学なポリグロットだったという点では金壽卿とちょっと似ている気がします。

彼は後にマルクス主義言語学の代表者と見なされるようになりましたが，もともと非マルクス主義者――ソ連流の言い方では「ブルジョア言語学者」――として出発し，ロ

シア革命以前に多数の業績をあげて，功成り名遂げていた人です。1901 年にペテルブルグ大学の教授になり，1912 年にはロシア帝国アカデミーの正会員という非常に権威の高い地位に就いています。ソ連時代に共産党に入りましたが，それは 1930 年という，割と遅い時期であり，当時彼はもう 66 歳になっていました。「ブルジョア学者」がもっと早くに共産党に入る例はたくさんありましたが，どうしてこんな遅い時期に入党したのか，よく分かりません。とにかく，ある時期以降の彼は「マルクス主義言語学」なるものを樹立して，権威者となったわけです。しかし，入党後わずか 4 年で死んでおりますので，いわゆる「マルクス主義言語学」なるものが体系化され，教条化されたのは，彼自身というよりは彼の後継者たちの活動によるのではないかという気がします。もっとも，私自身が十分通じているわけではありません。

さて，問題は 1950 年のスターリンのマール学派批判の意味です。ここには大きく異なった二つの解釈があります。一方においては，スターリンという政治の世界における最高権威，独裁者が，こともあろうに言語学などという抽象度の高い，一見したところ政治とは関係なさそうな分野にまで乗り込んで，権威ある発言をして，学問への乱暴な介入をしたという見方があります。ソ連における科学の蹂躙（じゅうりん）の典型例として想起されることがよくあるわけです。

しかし内容から考えると，大分違う側面が浮かび上がります。スターリン論文の前にマール学派による「マルクス主義言語学」なるものがあって，それが批判されたわけですが，その「マルクス主義言語学」とは，言語が上部構造であり，階級的な存在だという説なわけです。これに対してスターリンは，言語は上部構造ではないし，階級的な存在でもないと言うわけですから，これはある意味ではブルジョア言語学の復権という面があるということになります。

日本におけるスターリン論文の受容も，そうした二面性に翻弄されたのではないかという気がします。きちんと詳しく調べたわけではありませんが，古典的な言語学者のほうがスターリン論文を受け入れやすかったのに対して，日本共産党系の人たちは非常にびっくり仰天して衝撃を受けたようです。当時まだ若かった田中克彦さんの場合，その先生に当たる人たちは古典的な言語学者が多かったので，そういう人たちからいろいろと話を聞いたのだろうと思います。

話を広げますと，歴史学その他の領域でも似たような問題がありました。たとえばタルレという，かつて代表的な「ブルジョア歴史家」とみなされていた人が，第 2 次世界大戦（ソ連流には「大祖国戦争」）前後のソ連歴史学の変遷の中で復権し，他方では，

マルクス主義歴史家たちが大きく分裂して，その一部は徹底的に批判されるというようなことがありました[6)]。ソ連というと常識的に，マルクス主義者が威張っていて，ブルジョア学者は肩身が狭かったというイメージがありますが，そういう通念からいうとちょっと逆転したような現象が起こることがあるわけです。

そういうことを念頭において，北朝鮮においてはどうだったのか，金壽卿がどういうふうに関わっていたのかという問題を，本書の叙述から私なりに読み解いてみたいと思います。本書によれば，スターリン論文が発表されたのはちょうど朝鮮戦争開始時だったため，一応すぐに北朝鮮でも伝えられたものの，その影響が広まるのは少し後のことだったということです。金壽卿はそれまでマール学派の紹介などをしていたから，その影響があったことは明らかだけれども，もともと小林英夫経由でソシュールらの構造言語学を吸収していたから，全面的にマール学説に心酔していたわけではないとも書かれています（86, 169～171, 180頁など）。金壽卿のマール学説受容は全面的なものというよりは部分的なものであって，だからこそスターリン論文に接してもそれほど急角度に転回をせずに済んだということのようです。付け加えるなら，田中克彦流の解釈によればスターリン論文はソシュール言語学を事実上復権するものなので，金壽卿にとってむしろ都合が良い面があったのかもしれないと考えたくなる気がしないでもありません。そこまで言い切ってよいかどうかは，まだ分かりませんが。

本書に戻るなら，スターリン論文はもちろん金壽卿によって重要視されたけれども，そこには独自な部分的利用があったのではないかということが本書の181～182頁に述べられています。特に重視されているのは,「強制的同化に対する巨大な堅忍性と非常な抵抗性」という個所です。これは朝鮮語が強固な安定性を持っているということで，民族的自主性の根拠になるわけです。スターリンという権威を受け入れるというのは国際主義の論理だけれども，朝鮮語という言語が強固な安定性を持っているというのは特殊性，民族的主体性の要素であって，これが独自な形で結合されているというわけです。

これは恐らく金壽卿だけのことではなくて，スターリン自身が国際主義者なのか民族主義者なのかというと，実は両方だというところがあったんじゃないかという気がします。日本共産党の1950年代における受容にもそうした性格があったんじゃないかなと思うわけで，ここら辺は日本史の専門家に伺いたいところです。特に石母田正のような人をどう捉えるのかは大変気になるところであります。戦後初期の日本ということでいえば，旧仮名づかいから新仮名づかいへの移行とか，全面的仮名文字化の提案など，いろんな議論があり，それらが政治と複雑に交錯していたようですが，この辺も専門の方

による解明を待ちたいところです。

1.4 家族の連絡復活の背景：冷戦終焉と東アジア

本書では金壽卿とその家族が長い音信不通を経て，種々の契機で連絡が復活し，遂には面会することができるようになった経緯が詳しく述べられており，これは大変興味深い個所だと思います。

そこにはいくつかの事情の重なりがあったわけですが，中でも 2 つの出来事が特に重視されています。一つは，1988 年 8 月の北京における国際学術討論会です。このとき次女と本人が会うことができた。その文脈ないし背景として，ソウル・オリンピック準備，共同開催提案とその挫折，世界青年学生祭典誘致などのことが触れられています（277～281 頁）。次に 2 年後の 1990 年 8 月です。大阪で学術討論会があって，ここで本人が家族と会えるのではないかと予期されたけれども，直前に参加者が絞られたために，この期待は実現されなかったとあります。背後の事情は分からないけれども，冷戦終焉期の国際政治の展開のあおりを受けたものと想定されると書かれています。脱冷戦の胎動があったからこそ，この学会が大規模化し注目を集めたけども，それゆえに何らかの余波がこのような帰結をもたらしたのだろうということで，緊張緩和の兆しと揺れ戻しのジグザグの中にこういった出来事があったということです（283～284 頁）。

いま触れた 2 つの学術討論会について，私は本書ではじめて知ったのですが，その背景をなす冷戦の終焉過程は私の重要な研究テーマなので，その前後にどういうことがあったかを簡単に略年表風にまとめてみました。

1983-87 年：

オリンピック共同開催交渉があったが，87 年 11 月の大韓航空機爆破事件のせいで挫折。

1988 年：

米ソ接近（レーガンの訪ソと「悪の帝国」発言の撤回）と緊張緩和（ゴルバチョフの国連総会演説）。盧泰愚政権の「北方外交」開始。

9-10 月，ソウル・オリンピックに北朝鮮は参加を拒否したが，ソ連は参加。

1989 年前半：

ブッシュ（父）の大統領就任に伴う外交政策再検討と足踏み。この頃から，ソ連のメディアに北朝鮮に批判的で韓国に友好的な論調が出るようになる。

6 月，北京で天安門事件。

7 月，平壌で第 13 回世界青年学生祭典。

1989 年秋以降：

東欧激動。

11 月，ベルリンの壁開放。

12 月，マルタ会談。但し，通説と異なり，実は冷戦終焉を米ソ共同で確認したわけではなかった。

1990 年：

ドイツ統一をめぐる国際的駆け引き（7 月までに決着）。その南北朝鮮への影響？

8 月，湾岸危機始まる。

9 月，南北朝鮮首相会議開始。

韓ソ国交樹立。

12 月，韓ソ共同宣言。

1991 年 9 月，南北朝鮮が国連に同時加盟。

ここに挙げた一つ一つのことについて詳しく述べる時間的余裕はありません[7)]。また，ここに挙げた一連の事柄が先ほど触れた 1988 年 8 月の会議とか 1990 年 8 月の会議とどう連動していたかも今のところは分かりません。ただ，この略年表をざっと見るだけでも，ほんの数年の間に非常に細かい小刻みな変動があったということが分かります。しかも，そこには，米ソ関係，韓ソ関係，韓国と北朝鮮，あるいはソ連と北朝鮮，いろんなレヴェルでの関係があり，それらがすべて複雑に関連しつつ，小刻みな変動があったわけです。特に重要なのは，ドイツ統一を巡る国際的駆け引きが 1989 年から 90 年前半にかけて大きくうねっていたことだと思います。盧泰愚政権の「北方外交」は，かつて西ドイツのブラント政権が打ち出した「東方外交」を意識したものだったと思いますが[8)]，それがどういう風に展開したのか，またかつて「東方外交」を打ち出した西ドイツ社民党はその後下野して，ライヴァルであるキリスト教民主同盟のコール政権のもとでドイツ統一が達成されたわけですが，それはどういう意味をもったか等々，検討しなくてはならない問題は山のようにあります。詳しいことは私にもまだ分からないところが多いのですが，大まかにいって，緊張緩和を促進する動きと阻害する動きの両方があって，それらがいろいろとからみ合って展開していったのでしょう。本書に戻るな

ら，1988 年 8 月の会議とか 1990 年 8 月の会議をこうした大きな流れの中にどのように位置づけることができるのか――これは今後に残された大きな課題ではないかと思います。

1.5 「おわりに」から

本書の「おわりに」には，著者が克服したいと考えている問題状況ということが 9 点にわたって書かれています。「順不同」とあって，やや羅列的な気がしないでもありませんが，どれも重要な点だと思います。9 つもの論点を片っ端から全部取り上げて丁寧に吟味するゆとりはありませんので，私にとって特に印象的だった 4 番と 6 番について感想を述べたいと思います。

まず 4 番のほうですけれども，「植民地期や冷戦期の抑圧や制約の下に置かれた人々の行為者性〔エイジェンシー〕や，限界のなかでの創造的な思考を度外視したり，逆にその主体性を無前提に賛美したりする「上」からの視点」とあります（304 頁）。我流に言い直させてもらうなら，さまざまな抑圧や制約の下に置かれていた人々を単純に被害者として見なすだけでは，「あの人たちはかわいそうだ」っていうことで終わってしまう。それではその人たちをきちんと理解したことにならないんじゃないか。抑圧や制約の中でもある種のエイジェンシーというものがあるということを見ていく必要がある。他面，そういう人たちの「主体性」を単純に賛美して済むわけでもない。ここら辺が非常に難しく，微妙なわけです。いま現在のウクライナとロシアで困難な状況にある人たちのことを考えてみても，彼らは大変な制約の下に置かれていて，その中でいろんな思いを巡らしたり，行動をしたりしている。そういう人たちのエイジェンシーをどう理解するか，単純に同情したり賛美したりするだけでは済まない，そういう問題がわれわれに突き付けられてるのではないかと思います。

それから 6 番，「社会主義やソ連という存在を，単にもう一つの抑圧体制ないし帝国主義に過ぎないと位置づける，あるいはその逆に偉大な解放者として扱うようなイデオロギー的姿勢」とあります（304 頁）。これは私の専門なわけですけれど，私の感覚では，社会主義を「偉大な解放者」として賛美するという発想は，今はもう完全に消えてなくなっていると思います。むしろ，その単純な裏返しとして，「もう一つの抑圧体制ないし帝国主義に過ぎない」というふうに単純にあしらう傾向が非常に強い。そして，それは確かに当たっている面があるわけです。そのことを認めた上で，それだけが全てだと片付けてしまうと見失われてしまう問題もある。そのことを考えなくてはならない

のだけれども，それをどう考えるかが難しい。単純な「もう一つの抑圧体制」論に反撥するあまり，「偉大な解放者」としてまで復権する人は滅多にいないと思いますけども，案外悪くなかったんじゃないかとか，結構いい面もあったんじゃないかという弁護論は一部にないわけではない。それは分からないわけでもないけれども，やはりそう言い切ってしまってはいけない，というわけで非常に厄介な問題があるわけです。そのように厄介な対象にどう取組んでいくのか――これがわれわれにとって突き付けられてる課題ではないかということを考えさせられました。

とりとめのない報告で，書評としてはふさわしくないものになってしまったということを恐れますけれども，忌憚（きたん）のないご批判を仰ぎたいと思います。以上です。

2　戸邉秀明氏によるコメント
――「全体」を志向する「小さな経験」の大きな意義――

はじめに

まず自己紹介をさせてください。主たる専門は沖縄近現代史，具体的には戦時下の「方言論争」や米軍占領下の復帰運動史などの研究です。加えて近年では，戦後日本の史学史，つまり歴史学の「学問史」についても考えており，「マルクス主義と戦後日本史学」（『岩波講座　日本歴史22　歴史学の現在』岩波書店，2016年）等の論考を発表しています。今回，書評の役を仰せつかったのは，この点に関わるのでしょう。そこで私の発表は，板垣氏による『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』が，いかなる意味で歴史叙述を革新する方法的意義を有しているか，その検討を課題とします。

なぜ歴史学，歴史叙述の「方法」面から考えるのか。本書が，歴史学，あるいは外国史を含めた広義の地域研究への批判の意思を闡明にしているからです。それは何よりも，「私が不満を抱き克服したいと考えている学問状況の一端」として「おわりに」に列挙された，9項目に凝縮されています（304頁）。

この9つの，いわば〈歴史学批判のマニフェスト〉は，多くの現代史研究者にとって，耳の痛いものです。かくいう私も，そのうちの「③日本（人）が植民地期におこなったことや，解放後に残された「遺産」にだけ関心をもつような，反省的であるともいえるが，どこかしら帝国主義と裏腹の関係にある研究態度」には，一読，自分のことだと赤面しました。2008年の拙稿「ポストコロニアリズムと帝国史研究」の書きぶりなど，まさにそうした「態度」の現れでした[9)]。本書のインパクトを，朝鮮近現代史や東

アジア言語学史といった専門の枠内にとどめず，より広く共有することが，ぜひとも必要と感じた次第です（上記の各専門において徹底的に考証されるべき必要も承知していますが，それは私の手に余ります）。

もっとも，今日の私が過去の研究態度からどこまで離れられたか，まったく自信がありません。どのようにすれば抜け出せるか。それは本来，専門とする沖縄近現代史の研究で果たすべき仕事でしょう。とはいえ，狭い専門の枠内で史料を眺めるだけでは，新たな歴史像は描けません。本書のように優れた作品から，方法的な水準で学ぶことも欠かせません。本日はその点を念頭に，本書の方法的な観点の幾つかに絞ってコメントいたします。

2.1 〈評伝〉という方法を選ぶ――歴史学批判としての「物語り」行為

2.1.1 プロジェクトとしての〈評伝〉

初めに，評伝という叙述の形式が採られたことの意味について検討します。本書を指して，「〈評伝〉プロジェクト」（303 頁）と，〈　〉を付けて呼んでいるところに，プロジェクト＝投企として評伝を選びとった，著者の自覚が顕れています。

ただし，歴史を物語る形式は，書き手が随意に選べるわけではなく，ある程度，対象に規定されます。そこで少し廻り道をして，本書で直接書かれていない，執筆に向かう関心（動機）の所在から考えてみましょう。モノグラフと呼ばれる学術論文のスタイルや，博士論文を基にした著者の前著[10]とは異なる語り方を，なぜ選んだのか。背後にある問題意識は何か，ということです。

これかなという指摘は，「端的にいってしまえば，人の生きている歴史を描きたかった」（304 頁）と，さらっと書かれてはいます。実はこの述懐の直前に，先ほどから引用している 9 つのマニフェストが列挙されている。それを受けているわけですが，これは文字通り「端的に」出てくるものでしょうか。現下の学問状況を鋭利にサーベイされた上でのマニフェストと，「人の生きている歴史を描きたかった」という率直な思い。2 つの間は，橋渡しする何かがなければ，「端的に」接続できるものではありません。

それは，ある種の欲求，あるいは責務の感情とでもいうべきでしょうか。ある離散家族の歴史に，自分が偶然つながってしまったという連累の感覚によって，すべてが動きだした。その衝撃に突き動かされて，次々と物語が紡がれていく。読者は，「物語り」の原初的な現れに立ち合うことになります。本文の最初と最後がループしているのも，これと関係するでしょう。この仕掛けはプルーストの長大な小説に着想を得ています

が，そこに連累の感覚を痕跡として書き留めたいという，著者の思いが表れています（なお，「連累」という言葉の使い方は，テッサ・モーリス－スズキの言及[11]に拠っています）。

では欲求とは何かといえば，家族の歴史という「「小さな経験」の叙述」を通じてこそ見渡せる時代の「全体」を，何らか表現できるのではないかと気づく，啓示的な瞬間があったのでしょう。それは研究者としての，書きたい／書ける，という欲求の発露でもあります。

もっともそれは，たいへん重いものを引き受けたという責務の感情と同時であったはずです。偶然の出会いによって，いわば遺贈されてしまった他人の生涯の悲劇性への共感とともに，その他人の生が台無しにされることへの怒りの感情がなければ，この「物語り」は決して始まらなかったでしょう。とはいえ，そうした感情をナマで出せば良いわけでもありません。どのような方法によって，叙述として精練し，表現し，定着させるかが鍵となります。

余談ですが，ここで私は，同じ評伝という形式による作品として，安丸良夫『出口なお』（1977 年）を連想しました[12]。大本教の開祖となった一人の貧しい女性が拙い筆で書いた「お筆先」。それを精査した安丸は，人間の生を台無しにする幕末維新の激動（より正確には資本の原始的蓄積の過程）に対する，なおの怒りに共感し，極貧の苦悩から現世の価値体系を全否定する宗教的転回に至るなおを，「人生の戦士」として描き出します。しかもこの評伝は，安丸の民衆思想史の方法によって，一女性教祖の伝記にとどまらず，日本の近代化を経験した民衆の精神世界を透視する作品になっています。

著者による評伝形式の選択も，怒りや責務の感情を濾過して得られたひとつの〈方法〉であり，あくまで戦略的です。「人の生きている歴史」と対照的な歴史叙述の形式としては，マルクス主義の構造的な歴史叙述，たとえば「人間がいない」と昭和史論争で批判された唯物史観の階級一元論が，直ちに思い浮かびます。反対に，「人の生きている歴史」の最も明瞭な表現形式が，評伝や伝記であるのはもちろんです。何しろ主人公がはっきりしています。まさに「人間がいる」，あるいは「この人を見よ」と指し示す。そのように「物語り」を始めると宣言しておいて，著者はその実，むしろこの形式を奪用する（appropriate），評伝の脱構築とでもいうべき作業を遂行されています。

ただし，評伝という安定的な物語の形式を借りている以上，方法的な考察は，どちらかといえば「語り」の外側ないし余白に置かれることになります。私のコメントは，その「外側」を推測して，少しでも言語化してみようとする試みに過ぎません。

2.1.2　オルタナティブな歴史叙述への仕掛け

では評伝という形式において，「オルタナティブな叙述」（303 頁）のための仕掛けが，具体的にはどのようになされているのでしょうか。2 つの点を指摘しましょう。

ひとつは，個人史や時代の全体像にかかわる「歴史系列の章（第 1～5 章）」と学問史にかかわる「言語学系列の章（第Ⅰ～Ⅳ章）」の 2 系列の章を交互に配列する，「対位法的評伝」という構成です（19～20 頁）。もっとも，2 つの系列はキレイに分けられず，言語政策や政争をめぐって，相互に浸透し，「響き合う」ようになります。むしろその浸透を前提に叙述を進めることで，個人史・学問史・政治史の関係が，北朝鮮という歴史空間の中ではこのようにしかあり得ないという，生の条件として描き出されます。

もうひとつは，第 6 章「再会と復権」の多声性を駆使した叙述です。この章では，金壽卿の生涯がトロントにいるもうひとつの家族の側から捉え返されます。一般に評伝や伝記では，肉親の声は主人公のまさに“肉付け”となります。ところがトロントの家族たちは，主人公とは別の場所で彼の“不在”を生きねばならなかったため，強い他者性を帯びて登場します。著者はそれにより，この章に至る金壽卿の生涯全体を，あえて相対化します。これは，マニフェストの「④植民地期や冷戦期の抑圧や制約の下に置かれた人々の行為者性や，限界のなかでの創造的な思考を度外視したり，逆にその主体性を無前提に賛美したりする「上」からの視点」の問題性を照らし出す効果を持ちます。

ひとつは，これによって，離散家族に象徴される植民地主義と冷戦の暴力を，劇的に物語ることができます。互いの消息を知らずに，夫は再婚してしまっていた。妻の方でも，夫の死亡届を出さざるを得なかった。なぜ家族が引き裂かれたまま生きざるを得ないのか。その不条理が，異なる視線が交錯するポリフォニックな構成によって，よく表されています。

同時に，いまひとつの効果があります。この章より前は，対位法的な章構成の工夫があるとはいえ，知識人と国家の緊張関係が続く，これ自体は近現代史によくある物語です。それはまた，男性知識人と国家とが，互いに自分たちを屹立した存在として際立たせる物語を，共犯的に生産する手立てともなっています。それを批判する存在として，女性たちの他者性が対置される。とりわけ金壽卿夫人の李南載が，自己の決断，そして金壽卿との距離などによって，際立った存在として描かれます。

たとえば，朝鮮戦争下で自分たちが周囲から置き去りにされたと感じた李南載は，「帰ってくるかどうかも分からない夫を待つよりは，自分たちの力で南下して夫を探す方がましだと決断し」（以上 266 頁），子どもたちを連れて，自ら南に赴きます。しかし

その行動は，金壽卿からは「自分は最善を尽くして家族のもとに帰ろうとしたのだ，待っていてほしかった」（278 頁）と，悔恨と非難の入り交じった詠嘆によって評価されるものでした。この 2 人の距離に体現された他者性は，先ほどのマニフェスト④で言えば，李南載の「行為者性（エージェンシー）」として汲み取られるべきものです。

2.2　期待の次元と回想の次元――エゴ・ドキュメントを読み解く

2.2.1　結果論的歴史叙述への抗い

叙述の形式の次に，叙述の姿勢とでもいうべき本書の方法論について検討します。本書では「結果論的な歴史叙述に抗しよう」（18 頁）とする意思が幾度も表明されますが，この点こそ，本書における最も根本的な歴史学批判の位相だと言えるでしょう。

ではマニフェストで批判されている，「⑨結末から遡って，それに至るプロセスの説明としてのみものごとを語る結果論的な歴史叙述」の問題点は，どこにあるのでしょうか。ここでは補助線として，「期待の次元」と「回想の次元」という対概念を援用します。これは，鶴見俊輔が語り下ろした自伝から借りました[13)]。鶴見は，アメリカの人類学者レッドフィールドが提起した「当時の見方と，それを振り返る現在の見方とをまぜこぜにしないで，一つを歴史の期待の次元，もう一つを歴史の回想の次元として区別する」という考えを大切にしてきたと言います。本書が批判する「結果論的な歴史叙述」は，この「回想の次元」に相当します。

「回想の次元」，つまり現在から過去を再構成することで見えてくるものも，もちろんあります。けれどもそれは，いわば「死んだ過去」です。困ったことに，歴史学のモノグラフのほとんどは，往々にしてこちらになります。歴史学は，特定のまとまりをもった過去について，因果連関に基づく整合的な説明を目指します。そのために可能な限りの史料を集めて，過去を再構成するわけです。すると，できあがった歴史叙述は，それがもともとそのようになるべくして起こったかのように描かれ，「期待の次元」を切り捨てて法則や科学に近づいていく。結果として，当事者たちの行為の時点にあった，不安に満ちた情動や不確実性に直面してなされた判断を含む「期待の次元」とは，およそ接点を持たない過去が作られてしまいます。この問題から，いかにすれば逃れられるでしょうか。

「期待の次元」にたたずむ行為者が見た世界を完全に復元することは，もとより不可能です。問題は，残された史料を踏まえて，「期待の次元」と「回想の次元」，それぞれから見える歴史像を突き合わせて，いかに再構成し，どう語るかにかかっています。い

くら「未発の契機」を探究するとか，「敗者の視点」を獲得するとか，「内在的」に読解するといっても，それだけでは解決しません。評伝という形式は，歴史叙述にまつわるこうした原理的な問題を再考するために絶好の〈場〉として，著者によって自覚的に選ばれています。

2.2.2　エゴ・ドキュメントによる「期待の次元」の読解

「結果論的な歴史叙述」に対する抗いは，具体的にはどのようになされているのか。近年の歴史学の潮流をふまえて言えば，それはエゴ・ドキュメントの活用によって，「期待の次元」を注意深く読解するところに現れています。

エゴ・ドキュメントとは，ごく単純化すると，日記や手紙を典型とする，一人称で物語られた史料体を指します。それらを深く読解・解釈する欧米の歴史研究の新たな動向が，たとえば長谷川貴彦さんによって紹介され，実践されています[14)]。一人称で書く書記行為は，それによって自らの行為を意味づける意味生産の遂行でもあります。したがって実際には，その行為によってこそ，パフォーマティブな形で初めて「主体」が“生産”される。そこに，当時のどのような文脈が映り込んでいるかを読み解く。そのようにして，ある時代の歴史像を描き出そうとする研究が盛んになっています。本書には以下の 2 つの点で，そうした研究潮流との共鳴が見て取れます。

ひとつは第 3 章における，朝鮮戦争時の体験をもとにした金壽卿の手記の読解です。本書では「回顧録」と呼ばれるこの手記は，扱いが難しい史料と言えます。戦時に綴った簡単な行動日録（「リュックのなかの手帖」）をもとに，40 年以上も後にまとめられた（131 頁）。つまり執筆時点からすれば，これは「回想の次元」で語られた過去です。本書では，そこに書き込まれた「期待の次元」を読みとろうとするわけですから，歴史学上の史料批判の問題として，それはどこまで当時の「期待」そのままなのかという問題が生じます。

実証を旨とする歴史研究者は，「当時のまま」第一主義を謳います。「当時のまま」が復元できる（と考える）一番良い条件の史料を求めますが，「当時のまま」（と考えられる）以外の部分は，夾雑物として切り捨てがちです。これに対して著者は，金壽卿が回顧録を書いた時点，「期待の次元」と「回想の次元」が融合する時点に目を凝らし，金壽卿が〈公的な語り〉の内でつぶやいている〈個人の語り〉，2 つの語りのぶつかりあいから，朝鮮戦争当時の「期待の次元」の不安定さも含めた，彼が見た世界を捉えようとします。ここは，本書における史料読解のなかでも，著者の手捌きがつぶさにうかがえる，最も興味ある箇所です。

もっとも，離散した自分の家族を読者に想定したこの回顧録も，〈個人の語り〉を〈公的な語り〉によって統御することで，北朝鮮社会で生きるための「主体」を生産する行為として機能している。そういった面が，やはり大きいだろうと，本書の分析からは推測されます。この点が，回顧録に対する離散家族の側の違和感の根拠なのかもしれません（132 頁）。

もうひとつは，第 6 章で多用されている手紙のやりとりですが，その意味づけは難しいと感じました。晩年の金壽卿によるトロントの家族宛の手紙は，モノローグになっていく傾向が見られます。過去に向かう「回想の次元」が勝り，「期待の次元」が見出せる領域は縮減していく。果たしてこれは，単なる老いによるものなのか。それとも，1990 年代の北朝鮮の変化を読みとるべきなのか。北朝鮮の同時代史料が乏しい現状では，この問いは贅言でしかありませんが，エゴ・ドキュメントの読み取り方という点で考えさせられたところです。

2.3　2 つの「国際／普遍主義」――学問史の意図①

2.3.1　戦略的媒介としての「社会主義建設を担う言語学者」

報告の後半では，「本書は一種の学問史である」，「しかし単線的な学問発展史とはほど遠いものである」（18 頁）という言明の意味について，2 つの側面から考えてみます。

学問史という構えは，著者が金壽卿という言語学者を評伝の主人公に選んだことと，密接なかかわりがあります。言語学が果たした歴史的役割のために，著者は金壽卿によってこそ，20 世紀の歴史を語りうると直観した。では，なぜ言語学なのでしょうか。

著者が明言されるように，金壽卿という個人は，歴史を物語るための媒介です。けれどもその媒介が，社会主義建設を担う言語学者，しかも構造主義的な言語理論の体得者であるために，俄然面白くなる。文法規範の確立など，「朝鮮語の革命」を推進する言語政策の担い手という，政治家的側面があるから（だけ）ではありません。彼には，「構造主義と社会主義という 20 世紀思想史の二大潮流が，言語を媒介として流れ込んでいる」からです（p.14）。

構造主義に基づく知的実践である言語学運動と，政治的実践である社会主義運動。いずれも国際主義ないしは普遍主義を基盤としています。それゆえ，この 2 つは 20 世紀においてシンクロ（同調）していく。著者が対位法的な章構成ならば書けると思ったのも，一個人が体現した世界史的な「二大潮流」を分節化したうえで，同調する局面をあらためて緻密に描き込むためだったのでしょう。「マルクス・ボーイ」が「ソシュー

ル・ボーイ」にもなり得た時代，植民地下の知識人（29 頁）として，金壽卿は時代の要請をいかに引き受けたのか。彼の生涯は，2 つの運動の「交差点」として，両者の相似性と緊張関係を浮き彫りにします。

ここで金壽卿が，構造主義革命とも言われるソシュール以来の言語学の革新性を我が物としえた，東アジアでも数少ない知識人であったことは，何度強調してもしすぎることはないでしょう。マルクス主義「科学」の体系性と，これほど拮抗できる理論的な体系性と強度を持った学問が，ほかにあるでしょうか。たとえば歴史学では，金壽卿が実際に政治とわたりあったような緊張関係は作れません。マルクス主義と真正面で対峙できる理論的コスモスが，歴史学にはなかったからです。方法的な融通無碍は歴史学の個性でもありますが，それだけに唯物史観という科学主義に一番やられてしまったのが，20 世紀の歴史学でした。

それに対して金壽卿は，構造主義言語学という堅固な理論的支柱を持ち，同時に世界の研究と向き合って北朝鮮の言語学を更新できる開かれた関心を持続します。だからあれほどの葛藤と困難を経験しながら，むしろいっそう創造的な研究を続けられたのでしょう。それは，彼が北朝鮮で抹殺を免れ，国家の圧力をギリギリのところで阻む力にもなりました。

2.3.2　社会主義運動に賭けた人々の「期待の次元」をどう復元するか

他方の社会主義についてはどうでしょうか。マニフェストで「⑥社会主義やソ連という存在を，単にもう一つの抑圧体制ないし帝国主義に過ぎないと位置づける，あるいはその逆に偉大な解放者として扱うようなイデオロギー的姿勢」を批判しているように，社会主義運動の歴史を「回想の次元」で捉えた「結果論的」裁断に対する著者の姿勢は明確です。

では社会主義運動に賭けた人々の「期待の次元」は，いかに捉えたらよいでしょうか。彼ら彼女らが抱いた，当時の夢や構想のリアリティを，どうすれば復元できるでしょうか。本書ではたとえば，「識字運動」のグローバルな展開や，社会主義国の「兄弟」関係が持っていた連帯や発展のリアリティが描かれていますが，学問史として興味がわくのは，同時代の思想や学問において，マルクス主義とのさまざまな節合や交叉・交配があり得た事実です。

マルクス主義の受容は，当時の体制側の強要や，個々人が生き残るための方策という側面がありましたが，同時に創造的な事例があったはずです。たとえばマルクス主義と構造主義言語学との出会いは，金壽卿一人の孤独な作業ではなく，（少なくともある時

期までは）中華人民共和国でも進められたようですし，社会主義国間の学術交流も紹介されています（第 4 章注 12）。とりわけ第三世界と呼ばれた世界の各地で，思いもよらぬ知の交叉や混淆が起こっていたでしょう。既知の学問史とは異なる相貌を持つ学問史を知ることは，私たちが現にある経路とは異なる経路をたどって道を拓いていく，その手掛かりにもなるでしょう。

2.4 「主体の形而上学」という難問――学問史の意図②

2.4.1 「主体思想」の生成史の意味

学問史に関連してもうひとつ，いわゆる「主体（チュチェ）思想」の思想史的位置づけをめぐる著者の考察にふれておきます。北朝鮮における「主体思想」の席巻が，どのようにして金壽卿の学問的生命を奪っていくのか。本書の後半ではその過程について，北朝鮮における学問運動と社会主義運動が閉塞する要因として，かなりの筆を尽くして説明しています。

特に第Ⅳ章の 1 では，言語学を事例とする「主体思想」の生成史が展開されます。生成史とは，「主体思想」を「期待の次元」から再構成する作業と言えます。一気に出来上がった，あるいは生得的に存在するかのような遡及的な議論を排して，いかなる状況の合成として作られたのかを，慎重に見極めていく筆の運びをしています（229 頁以下等）。このような作業は，マニフェストの筆頭に挙がる「①北朝鮮に対する極めて偏った知的関心」，とりわけ「⑧民族主義的な枠組みを思考の前提に歴史を語る，あるいは逆に民族や民族主義に対する内在的な理解を抜きに歴史を語ろうとする非歴史的思考」を是正するために必要な手続きであり，イデオロギー的文書として軽視されてきた史料に対する精緻な読解の賜物です。

こうした分析は，「国民」創造の根幹に位置する言語を司り，民族主義の政策的表現である言語政策に関与し，さらには感情や美学的要素を問題としうる言語学をめぐってであるがゆえに可能であることは，再度強調しておきましょう。北朝鮮を論じる際にお決まりとなっている権力闘争史の枠組では，歴史を動かす論理の力は見えないことがよくわかります。

2.4.2 「主体の形而上学」の執拗さ

多くの読者は第Ⅳ章の分析から，「主体の形而上学」が北朝鮮に限らず，20 世紀の各地において執拗なまでに現れることに気づかれるでしょう。この点に着目して，「主体の形而上学」をめぐる著者の分析を，読者が自己の関心や研究にそくして活かす道があ

るはずです。

1950年代末以降の北朝鮮では，「主体」の強調にともなって，自らの「固有性」を見出す際に比較の基礎としてあった「一般性」が次第に消去され，「民族的自主」が文字通り比類無きものとなります（199～200頁）。その際，「自主」の根拠たる理論的権威の源泉には，至上の「革命伝統」とされる金日成思想が据えられ，すべてがそれに還元される。本書はそれを，「外部」を抹消し，すべてを「内部」に置き換えていくプロセスと表現します（258頁）。

この表現は，酒井直樹さんの「雑種性」という概念を手掛かりにしています（第Ⅳ章注33）。本来，雑種的でしかありえず，「唯一の起源」などありえない現実を否認することで，「純粋性」を獲得しようとする。こうした「雑種性」の殲滅による「純粋性」ないしは「純血性」の希求こそ，「主体の形而上学」を駆動させる力だと言えます。

もちろん，こうした衝動が現実政治に現れる場面は，20世紀の社会主義体制や旧植民地の独立後のナショナリズムに限りません。人によっては，ファシズムという言葉で説明したくなるかもしれません。しかし，まず注目すべきは，「主体思想」に宿されたポスト植民地主義の位相であり，それ固有の問題性を見すえる必要があります。20世紀後半の北朝鮮に現れた，（実際には存在しない）“喪失した原初の自己”を回復しようとする，暴力を伴う激しい衝動。それこそが，植民地主義の反作用であり，日本の植民地支配が現地社会に与えた最も深い傷の痕跡である。そう捉えることで，初めて見えてくる歴史の位相があることを，本書は示唆しています。

詳しく展開する余裕はありませんが，ここで沖縄との比較を考えてみましょう。「主体思想」が確立していく1960年代は，沖縄では，米軍占領下で祖国復帰運動が盛りあがる時期に当たります。沖縄の場合，米軍批判によってせり上がる「民族的自主」が，当時の社会主義民族理論では「復帰」すべきヤマトに収斂することになっていたため，「沖縄人」としての自己との葛藤を引き起こすという“ねじれ”が加わります。ですから単純な比較はできません。それでも，復帰運動が戦前の（日本への）同化主義の単なる反復として片付けられないのは，植民地主義に対する反発からくる「純粋性」獲得の欲求として，日本史にとどまらない普遍性を持っているからです。北朝鮮の歴史を，異なる体制の「対岸の火事」とみなすわけにはいきません。この点は，マニフェストで「②植民地史には関心があっても解放後史には関心がない，あるいはその逆に解放後史を植民地史から切り離して捉えるような研究の時間的スパン」として克服の必要が説かれていることが，沖縄史にも当てはまります。

また「主体の形而上学」における「内部」の全面化が，実は「外部」からの“剽窃”によって進められるダイナミズムの解析も，たいへん参考になります。前述の通り，「主体思想」は外部との参照関係を消去することで，それ自体として屹立する権威を作り出します。しかし実際には，「主体思想」の中核にある「堅忍性」や「民族的自主性」といった概念は，スターリン論文に起源を持つ。そのような参照関係を抹消し，「革命伝統」に還元することで「主体思想」の根幹に据える（256 頁）。これこそ起源の隠蔽なのですが，この一連の過程では，「内部」を全面化することで，かえって「外部」からの剽窃が野放図に可能となるメカニズムが見てとれます。「主体思想」の淵源ともなる「「民族的自主」という考え方は，一見「国際主義」的なものと二律背反的なもののようでいて，むしろ絡まり合っていた」のです（178 頁）。マニフェストの「⑤朝鮮史を叙述する際に，その国内的な状況だけを見るか，逆に大国に振り回された存在としてのみ見る一方的な視点」という，これまたよくある日本社会の朝鮮史観が，実証的に批判され，叙述において克服されています。

私たちが「主体思想」を奇怪と感じるのは，このように「内部」と「外部」がねじれて縫合され，撞着が撞着にならないところにあるのでしょう。しかし，そのメカニズムがここまで明快に分節化されると，ねじれや奇怪さをはらんだ「主体の形而上学」は，私たちの身の回りにも相当在ることが見えてこないでしょうか。

金壽卿の言語学は，このような「主体の形而上学」の対極にあります。彼の言語学は，比較のなかで初めて見いだされる「特殊」であり，そこには「一般言語学」由来の思考法が一貫していました（199 頁）。それは，唯一の起源や正統に還元することなく，雑種性や同時多発性を前提として言語の歴史的変化を考えるものですから，世界史を「国民史」の集合体としか考えない歴史認識を壊す衝撃力を持っています。それゆえに，彼の言語学が政治的圧力のなかで身をよじるように変化していく過程，それにもかかわらず一貫する思想を，あぶり出すように描いていく本書後半の叙述は，思想史叙述として圧巻と言えます。

2.5 「全体史」の構想の意義――グローバル時代の歴史叙述とは？

2.5.1 「全体」への窓としてのグローバル・ヒストリーとの共振

最後に，本書が目指す「一個人を交差点とした「全体史」」（17 頁）という構想の含意を考えてみましょう。本書における「全体史」の構想は，近年の歴史学の新たな潮流であるグローバル・ヒストリーの動向と共振する関係にあると思われます。

生涯を通じた金壽卿の活動範囲は，朝鮮半島と日本を中心とする東アジアの一部に限られます。それなのにグローバルとは，看板に偽りありだと詰め寄られるかもしれません。しかし，地球規模の実際の移動だけを追いかけるのがグローバル・ヒストリーではありません（トロントの離散家族を含めれば，本書が扱う移動も相当なものですが，距離が問題ではないのです）。ある特異な場所を定点として，そこから当時のグローバルな構造性と関係性の全体を展望，あるいは透視するような歴史叙述も，グローバル・ヒストリーの重要な方法として注目されています[15)]。いわば「全体」への〈窓〉として，グローバル・ヒストリーを構想する視角です。構造主義言語学の学問運動と社会主義運動という 2 つの国際／普遍主義の北朝鮮での現れを通して，20 世紀のグローバルな文脈を露わにする。そのような本書の「全体史」の構えと，歴史学の近年の動向には，通じ合う関心があります。

20 世紀の朝鮮半島に生きる一個人を媒介として世界史を展望する視点もまた，歴史学の革新的潮流に棹さすものです。個人を「無数の諸関係が行き来する交差点」（17 頁）と捉える著者は，金壽卿を媒介として，読者に「全体」を感知させることを企図しています。これは，リン・ハントが『グローバル時代の歴史学』で，「社会」と「自己」を再考し，ボトムアップ型のグローバル・ヒストリーを構想していることと響き合うものです[16)]。

歴史学の最新の動向と共振する視点を，著者は，専門である人類学の批判的動向から学んだものと推察しますが，人間や歴史の見方において，人文・社会系の諸科学が一定の収斂を見せつつあることは，興味深い現象です。

2.5.2　志向性としての「全体史」

ここまでの言及でおわかりのように，著者が追求する「全体史」は，体系的な〈理論〉のような固い枠組を目指すものではありません。あくまで，歴史を捉える際の〈姿勢〉とでもいったような志向性を指していることには，注意しておくべきでしょう。

「全体」を描くことは目的ではなく，またそれは当然不可能です。そうである以上，「全体史」への志向性は，歴史を叙述するすべての記述者に対して，自己の歴史生産は常に不完全であり未完であるから，常にその部分性を自覚して描けという，ある種の行為規範として読み直せるでしょう。たとえば，史料や記憶の欠落を自覚することで，自分がわかっている範囲の過去の事実の意味づけも変わります。その欠落を，単なる断片ではなく，私たちが知悉しえない「全体」の徴候，ないしは痕跡であると想像すること。それによって，各自の叙述を更新していく。そのような日々の仕事によってしか，

歴史研究の革新はありえません。

また本書は，その更新を，一個人が媒介する，あるいは一個人に流れ込む「全体」を探究する仕方で成し遂げています。このことは，私たちが自明のものと観念している「個人」,「自己」,「主体」，あるいは「他者」というものの把握の仕方そのものを再考するように，叙述者に働きかける効果があります。行為や意思の起源としての「内面」や「主体性」から出発して,「自己」や「主体」を語るのではないあり方。それはいわば「期待の次元」を，より身体化することであり，本書における「回顧録」の読み方に，それはよく現れています。

以上のように，本書は歴史学や歴史叙述の惰性的な現状を根源的に批判し，オルタナティブな叙述のあり方を，さまざまな工夫によって提起しています。無論その宛先は，朝鮮近現代史や東アジア史の研究者に限られません。一方で一読者として，金壽卿とその家族の歴史（とその描き方）に感動を覚えつつも，他方では研究者として，本書の示唆を元手にどのような試みが自らは可能かと問われているわけです。マニフェストが提起する,「⑦研究者の属する学問分野の枠組にとらわれ，特定の部分のみを切り取ろうとする知的制約」を乗り越えるための協働への呼びかけ，あるいは励ましとして受け取って，本書を読み終えたいと思います。

おわりに

結びに代えて，2022 年 3 月という“いま”，本書を読んだことから来る感慨を 2 点述べて，拙いコメントを閉めさせていただきます。

読後あらためて考えると，本書は金壽卿の生涯の叙述を通じて，著者自身の「期待の次元」を率直に開示した作品だと言えます。晩年の金壽卿は,「脱冷戦へと向かう東アジアの流動的な状況において」，朝鮮時代の言語学者の「国際交流の産物である言語学のテキストに，新たな関係構築への希望を託した」(297 頁)。それと同じように，著者は金壽卿が言語学を通じて示した創造的行為に，朝鮮半島の「分断克服」や「平和プロセスの実現」を志向する現在の私たちの「期待の次元」を仮託しています（312 頁)。では読者は，本書を読むことで，いかなる「期待の次元」を自らのうちに見出せるでしょうか。現在の日韓・日朝関係は，金壽卿が晩年に垣間見た可能性からも，遠くかけ離れてしまいました。それでもなお（いや，いまだからこそ)，著者が私たちに投げかける問いの重さを，いっそう感じます。

もうひとつ。私たちはいま，21 世紀における最新・最大級の「離散」を，毎日テレ

ビ等で目にしています。そこに，20 世紀から現在まで続く世界史上のさまざまな「離散」の経験をいかに想起して，自らの「連累」を発見できるか。それによって，眼前の事態の把握は大きく異なってくるはずです。たとえば，今回の戦争が始まって以降，沖縄の地元紙の紙面には，目の前に映し出された空爆の光景や難民の姿に，75 年余り前に自分たちを襲った災厄を重ねて涙する人々がいます。そして本書の家族たちと同じく，朝鮮戦争で「離散」した多くの人びともまた衝撃を受けているでしょう。

もちろん，「戦争反対」のかけ声だけでは戦争に抗し得ない。そのような現状にあるからこそ，あらためて問題の根本に立ち返って，「植民地主義と冷戦のつくりあげた学問の壁を克服しよう」とする思考（305 頁）が，ますます必要となります。少なくとも，そうした克服への意志と，克服できていないことの自覚をもって，眼前の事態に向き合っていきたい。それが，本書を 2022 年のいまこの時に読む機会を得た，一読者の小さな決意です。

※付記 1：当日の報告では省いた部分を，レジュメに基づいて補足した箇所があります。

※付記 2：「2.2」以降で用いている「期待の次元」と「回想の次元」という対概念について，当日の私の報告では，「期待の地平」と「回想の地平」と誤記しておりました。ここに訂正してお詫びします。もちろん，この概念をめぐって当日お話しした趣旨そのものは，出典である鶴見の議論をふまえたものである点は変わりません。なお，「期待の地平」という用語自体は，ドイツの文学史研究者 H・R・ヤウスが『挑発としての文学史』（轡田収訳，岩波書店，1976 年）において，ガダマーの哲学的解釈学の重要概念である「地平の融合」をふまえて展開した受容美学の基礎概念です。したがって鶴見の議論とは，さしあたり別の枠組ですが，今後の歴史理論の発展のためには，両者を突き合わせて検討する必要があると考えています（そんな夢想あっての混濁と誤記でした）。

注

1）板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』（人文書院，2021 年）。

2）オンライン開催となった理由は，新型コロナウイルス感染症拡大予防のためであった。

3）益田肇『人びとのなかの冷戦世界――想像が現実となるとき』（岩波書店，2021 年）。

4）石川健治「コスモス――京城学派公法学の光芒」酒井哲哉編『帝国日本の学知〈第 1 巻〉「帝国」編成の系譜』（岩波書店，2006 年）。

5）小林潔「書評：田中克彦『「スターリン言語学」精読』」，*Travaux du Cercle linguistique de Waseda*（早稲田大学言語研究会），Vol.4（2000）；同「補遺・書評：田中克彦『「スターリン言語学」精読』」*Travaux du Cercle linguistique de Waseda*（早稲田大学言語研究会），Vol.5（2001）；塩川伸明『民族と言語――多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』（岩波書店，

2004 年）；田中克彦『言語からみた民族と国家』（岩波書店，1978 年；岩波同時代ライブラリー版，1991 年；岩波現代文庫版，2001 年）；同『「スターリン言語学」精読』（岩波現代文庫，2000 年）；ジョレス・メドヴェージェフ，ロイ・メドヴェージェフ『知られざるスターリン』（現代思潮新社，2003 年）の第三部第三章「スターリンと言語学――ソヴィエト科学史の一エピソード」；Michael Smith, *Language and Power in the Creation of the USSR, 1917-1953*（Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 1998）；Vera Tolz, *Russian Academicians and the Revolution: Combining Professionalism and Politics*（London: Macmillan, 1997）, Chapter 4; Uyama Tomohiko, "From 'Bulgharism' Through 'Marrism' to Nationalist Myths: Discourses on the Tatar, the Chuvash and the Bashkir Ethnogenesis," *Acta Slavica Iaponica,* Tomus 19, Sapporo（2002）；В. М. Алпатов. «Новое учение о языке»и востоковедное языкознаие в СССР //Народы Азии и Африки, 1988, No.6.

6）立石洋子『国民統合と歴史学――スターリン期ソ連における『国民史』論争』（学術出版会，2011 年），同「パンクラートヴァとタルレ――スターリン期のソ連を生きた二人の歴史家の生涯」「『アリーナ』（中部大学）第 10 号（2010 年）参照。

7）冷戦終焉過程については，塩川伸明『歴史の中のロシア革命とソ連』（有志舎，2020 年）の第 6 章「冷戦の終焉過程――冷戦史再考の試み」参照。また，数多い関連文献の中で特に重要なものとして，吉留公太『ドイツ統一とアメリカ外交』（晃洋書房，2021 年）。

8）「北方外交」と韓ソ関係については，横手慎二「ソ連の北東アジア政策（1986-1991 年）――ソ韓関係を中心として」西村明・渡辺利夫編『環黄海経済圏――東アジアの未来を探る』（九州大学出版会，1991 年），金成浩「韓ソ国交締結と北朝鮮――ソ連の対朝鮮半島政策」『国際政治』135 号（2004 年），同「韓国の北方政策とソ連――秘密外交（1988-1991 年）に関する新資料を中心として」琉球大学『政策科学・国際関係論集』第 8 号（2006 年）参照。

9）戸邉秀明「ポストコロニアリズムと帝国史研究」（日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社，2008 年）。

10）板垣竜太『朝鮮近代の歴史民族誌：慶北尚州の植民地経験』（明石書店，2008 年）。

11）たとえばテッサ・モーリス－スズキ（田代泰子訳）『過去は死なない――メディア・記憶・歴史』（岩波書店，2004 年），第 1 章。

12）安丸良夫『出口なお』（朝日新聞社，1977 年）。

13）鶴見俊輔『期待と回想』上・下（晶文社，1997 年），特に下巻 25～26, 172, 184 頁。

14）長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店，2020 年）。

15）ゼバスティアン・コンラート（小田原琳訳）『グローバル・ヒストリー――批判的歴史叙述のために』（岩波書店，2021 年），第 4～5 章。

16）リン・ハント（長谷川貴彦訳）『グローバル時代の歴史学』（岩波書店，2016 年），第 2～3 章。

（第 20 期第 8 研究会による成果）

書評シンポジウム

植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する

――板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿1918―2000』(2021年)を手がかりに

— 日時
2022年3月8日(火) 13:30～17:00

— 場所
オンライン(Zoom)

— 参加
一般参加可(事前登録制[人数制限あり：先着])
参加をご希望の方は、以下のフォームよりお申し込みください
(開催前日を目処にZoomの参加情報をお送りします)
https://forms.gle/4EQorTqhT8Z28qwV8

— プログラム
前半：著者による自著解題＋評者からのコメント
後半：著者の応答＋指定討論者によるコメント＋一般参加者を交えた自由討論

— 評者
塩川 伸明(東京大学名誉教授・ロシア政治史)
戸邉 秀明(東京経済大学教授・日本近現代史)

— 著者
板垣 竜太(同志社大学教授・朝鮮近現代史)

— 司会
駒込 武(京都大学教授・台湾近現代史)
水谷智(同志社大学教授・イギリス帝国史)

主催：同志社大学人文科学研究所・第8部門研究「現代レイシズムの批判的比較分析―植民地研究との融合を目指して」